

ワルシャワ蜂起（1944年）直前の動向

ユゼフ・ショスタク、アントニ・フルシチェル
 Józef Szostak, Antoni Chruściel
 (渡辺克義 訳)

Józef Szostak, "Ten Days before the Outbreak of the Warsaw Uprising, 1944", *Stolica*, no. 31 (1130), 1969; Antoni Chruściel, "Before the Battle", *Powstanie Warszawskie*, London, 1948 (trans. by Katsuyoshi WATANABE)

訳者はしがき

以下に示すのは、ワルシャワ蜂起直前の動向について記した国内軍幹部の回顧録である。

最初にあげるのは、Józef Szostak, „Dziesięć dni przed Powstaniem w Warszawie 1944 r.”, *Stolica*, nr. 31 (1130), 1969 の全訳である。ユゼフ・ショスタク（1897-1984）は、ワルシャワ蜂起の直前、国内軍総司令部第Ⅲ部（作戦）長であり、首都で「嵐」作戦を実行する決断を下すうえで重大な影響力を持ったひとりである。以下の回顧録では慎重派であったかのような印象を与えているが、参謀次長のヤヌシュ・ボクシュチャニンによれば、ショスタクはオクリツキに次いで急進派だったという（ヤン・チェハノフスキ（渡辺克義訳）「ワルシャワ蜂起と国内軍総司令部——蜂起最終決定の背景——（3）（E）国内軍総司令部作戦参謀ヤヌシュ・ボクシュチャニン大佐との会談覚書」『山口県立大学学術情報第4号〔国際文化学部紀要第17号〕2011年、78頁）。

その次にあげるのは、Antoni Chruściel, „Zeszlóroczne Powstanie”, *Polska Walcząca*, nr 46, 1945 の全訳である。アントニ・フルシチェル（1895-1960）は、蜂起の直前、国内軍ワルシャワ地区司令官で、実戦で部隊を指揮する重要な地位にあった。彼が1944年7月31日夕刻に国内軍総司令部にもたらした、「ワルシャワのドイツ軍橋頭堡に赤軍が入った」という報が、翌日の「嵐」作戦実施を決める直接の要因となった。そのフルシチェルがどのように自己の立場・見解を説明しているかという点で本稿は興味深い。なお、フルシチェルは他の数編の回顧記事を加えて、後年『ワルシャワ蜂起』（*Powstanie Warszawskie*, Londyn 1948）という題で冊子として上梓した。その際、本稿のタイトルを「戦闘開始前」（„Przed bojem”）に改題している。

* * * * *

ユゼフ・ショスタク「ワルシャワ蜂起の10日前」

ワルシャワの蜂起の決定は、1944年7月中旬にヴィスワ川から東の戦線で形成された戦況に関連して下された。

この状況については、すでに多くが書かれており、その評価をめぐっては多様である。アダム・ボルキェヴィチ大佐、ヤン・ジェベツキ大佐、イェジ・キルフマイエル将軍によるものなどがある。すべて、史料に依拠し戦後に書かれたものである。私は国内軍総司令部第Ⅲ部（作戦）長であったが、意見を述べたことはなかった。

ワルシャワで蜂起が勃発してから25年経った今日、自分がよく記憶している細部の重要な点のいくつかをお示ししたいと思う。それにより、国内軍総司令部がどのように戦況を見ていたのか、どう準備が進められていたのかが、明らかになろう。私の一筆が史的研究の一助になればと思う。

蜂起開始前の戦況分析に私は部分的に関わるだけだった。私の直属の上司は作戦参謀（1944年7月当時、“コブラ”（レオポルト・オクリツキ将軍））であった。彼は、作戦問題で参謀次長の地位にあり、“グジェゴシュ”（タデウシュ・ペウチンスキ将軍）の配下にあった。彼らには、第Ⅱ部が蒐集する情報や報告が届けられていた。私個

人は、“コブラ”からもたらされる材料を利用していた。このほか、当時入院中のイエジ・キルフマイエル（第Ⅲ部とつながりがあった）が整理した、ドイツの刊行物の切り抜きなどを得ていた。

1944年7月、私の戦況分析は「嵐」作戦（ワルシャワはその対象外とされていた）の視点から行われていた。

1944年7月20日頃、“グジェゴシュ”から、ニェポドレグウォシチ通りのそれまで覚えのない場所での会合に出るようにとの呼び出しを受けた。その場に出頭すると、“グジェゴシュ”と“コブラ”がいた。“グジェゴシュ”は前置きもそこそこに、ワルシャワでの戦闘が予定されていると伝えた。まだ決定ではなく、“ブル”と政府代表にこの計画を報告することになると言った。“コブラ”は計画を支持していた。政治的要因について説明はなく、純粋に軍事的要因についてのみ説明があった。

ワルシャワはドイツ軍が防衛に入るだろうと判断された。首都の崩壊を防ぐため、戦闘はできるだけ短期間で終える必要があった。このため、もし赤軍がワルシャワの制圧に乗り出した場合、国内軍はドイツ軍に攻撃をかけ、街を押さえなければならなかった。戦闘は、一斉蜂起に向けて長らく準備してきた計画に沿って行われることになった。

赤軍の活動から、早期にヴィスワ川に達することを目指していることは間違いと判断した。極めて広範囲にわたって、赤軍がヴィスワ川を渡河する可能性もあった。政治的要所・交通の要衝としてワルシャワ制圧を目論んでいるケースも考えられた。もっとも、この評価において、我々が根拠のない判断をしていたわけではない。スターリンもまた、8月初旬にはワルシャワの制圧を計算に入れていたのであった（Jerzy Kirchmayer, *Powstanie Warszawskie*, str. 62）。

以上のような戦況分析とワルシャワ戦の構想に関連し、“グジェゴシュ”は私に意見表明をするように求めた。私はまず、人口の集中する地、とりわけワルシャワでの戦闘を予定しない「嵐」作戦からの逸脱である旨を強調した。ワルシャワは武装化という点で戦闘への準備ができていなかった。一斉蜂起計画は、数ヵ月前からドイツ軍がワルシャワで塹壕を掘り、有刺鉄線の障害物を設けて守りを強化していたことから、現実的でなくなっていた。戦況がめまぐるしく変わっていたので、私にはワルシャワ地区司令官が短期間で戦闘準備を整えることができるとは思えなかった。しかし、もしワルシャワ戦が決断されるのであれば、作戦部長として、次の点を要請したいと思った。

1. ワルシャワの蜂起決定の時は国内軍総司令官が下すべきであり、他のだれであってもいけない。その「時」は、赤軍がワルシャワの制圧を目的とした活動に間違いなく入る「時」でなければならない。この「時」の選択は蜂起の成功を左右する決定的に重要な問題であり、繊細な問題であるように思われる。
2. ロンドンから武器・弾薬投下の確約を得ること。
3. 蜂起に有利となるような空爆の確約を得ること。
4. 落下傘部隊の投下。

第3、第4の要請は、後に知ることになるのだが、技術的な理由により実現不可能であった。

“グジェゴシュ”は私の発言を聞くと、ロンドンに宛てる電文の草案を準備するようにと命じた。私はその準備をし、“グジェゴシュ”に渡したが、それが打電されたかは知らない。

ワルシャワでの蜂起については、その旨連絡を受けるという条件のもと、我々は別れた。このあといくばくもしないうちに私は会合に呼び出され、ワルシャワで蜂起を執行することを知らされた。同時に、“ブル”将軍は、会合は毎日、朝と午後を開くと言った。会合にいつも出席していたのは、次のメンバーである。“ブル”将軍、政府代表ヤン・ヤンコフスキ（“ソプル”）、“グジェゴシュ”、“コブラ”、アントニ・フルシチェル大佐（“モンテル”）、カジミェシュ・イラネク＝オスメツキ大佐（“ヘレル”）、ユゼフ・ショスタク大佐（“フィリブ”）。

初期のある会合で、国内軍総司令部参謀部と政府代表部の所在地を変更することが決まった。一斉蜂起の場合に予定されていたモトゥフ地区が郊外であることから、国内軍総司令部が戦闘中のワルシャワから切り離されてしまうため、適所ではないと判断された。政府代表と国内軍総司令官は、ワルシャワを押さええるべき時にその場にいることが特に重要だったのである。こうして私は、他の候補地を捜すよう要請されたのであった。しかし、この作業は容易ではなかった。イエジ・カムレルと話し合い、ジェルナ通りにある彼の経営する家具製作所を候補地に推した。しかし、最良の選択ではなかった。工場は東西の連絡に直接有利な場所ではなく、西の端にあったからであ

る。しかし、国内軍総司令部と政府代表部の多くの幹部が最終段階において特別な関心を引き起こすことなく集まれるという点で有利であった。無線局を設けることも可能だった。そして、極めて重要な点は、工場の全従業員が地下活動に精通していたことである。

幹部のいる場所に変更が生じたことで、“バシュタ”中隊をモコトッフに置く必要性が出てきた。同中隊はモコトッフをめぐる攻防戦を指揮することになった。国内軍総司令部と政府代表部の擁護には、ヴォラ地区に入っていた“ケディフ”が充当された。工場の直接の守備は第1112小隊(イエジ・カムレル少尉(“ストラシュ”)が組織した“イエレン”部隊に所属)にその役割が任せられた。

上と同じ会合であったか、その次の会合であったかで、国内軍総司令部と政府代表部の構成員が厳密に決められた。総司令部のメンバーは、“ブル”と“グジェゴシュ”のほかには、第Ⅲ部の全員、“ヘルル”大佐、“クチャバ”大佐、無線局・暗号解読班・通信部の構成員がいた。代表部には、代表(および秘書)と拳闘一評議会議長(および秘書)がいた。

次の会合では、誰がワルシャワ戦を指揮するのかという問題が提議された。“ブル”将軍か“モンテル”か。“モンテル”ということに決まった。“モンテル”のところには上位指揮系統があり、そしてそれがしばしば下位の指揮官を管轄していることを私は経験から知っていた。だから私は“モンテル”に、彼の指揮系統の邪魔はしないようにすると約束したのだった。

ワルシャワで戦闘を行うことを決めてから実行までの間には、数日あった。戦況はワルシャワ戦の即時開始もありうることを伝えていたので、“モンテル”に、戦闘決定を受けてから開始までにどれだけ時間が必要かと問うた。“モンテル”はそれを12時間とした。状況から戦闘の即時開始が必要でありながら、その戦闘許可の指令を受けるまでの時間がない場合、どうすればよいか、と彼は質問した。その場合は、許可を得ることなく戦闘に入ることを認める、と“ブル”は答えた。ポーランド人男性に対し要塞を築くよう召集があると、“モンテル”は自分が動員をかけた場合の非常な脅威になると考え、1944年7月27日に準備態勢に入るようにと命じた。私はこのことを“グジェゴシュ”に報告したところ、準備態勢が解除された。これは規律違反であった。準備態勢に入ったならば、解除できないとなっていたからである。準備態勢に入ることが命じられたならば、自動的に指定時刻に戦闘を開始する手はずになっていた。この時期尚早の準備命令とその解除は、兵士たちの精神状態にネガティブな影響を及ぼした。

戦闘開始時刻を未明から17時に変更する件は、“モンテル”の進言に基いて決まった。夜間外出禁止令が早い時刻に出され、それから未明までの間に小隊を集め、攻撃の準備を進めたならば、敵に容易に見つかってしまう、と彼は考えたのである。小隊を都市の交通量の多い時刻に動員させたならば、敵に気づかれずに実行できるとのことだった。

会合ですべて細部に至るまで決まった上は、残された作業はワルシャワ近郊の戦線の推移を追うことだけだった。ドイツ軍が軍備増強していることは自明で、我々は不安を募らせていた。私個人は、戦闘開始時の決定が最も難しい問題で、心配していた。

31日朝、いつものメンバーで通常の会合に臨んだ。未確認情報ではあるが、ベルツォヴィズナにソ連戦車2輛が現れた、と“モンテル”が報告した。状況を総合的に判断した結果、“ブル”将軍は、8月1日に戦闘を開始するだけの材料に乏しい、と結論した。午後の会合はパンスカ通りで17時または18時に開くと決めて、解散した。正確な時間は覚えていない。私は会合には時間通りに出た(間違いなく、時間通りである。私が遅刻したとしている論文があるが、それはちがう)。私は(古いワルシャワの建物に多く見られる)典型的なテーブルのある部屋に入った。テーブルの先の長椅子には政府代表と“ブル”将軍が座っていた。その隣の安楽椅子には“グジェゴシュ”が座っており、“コブラ”と“モンテル”が立っていた。ほかには誰もいなかった。ヤニナ・カラシュヴナ(“ベルク”、第Ⅴ部の部長を務めていた)は間違いなく不在だった。私は敷居のところから全員に会釈をした。その時、“ブル”将軍は、「フィリプ、明日、始めるぞ」と言った。私はこの決定に驚き、「決定には第Ⅱ部長も第Ⅲ部長も必要なかったのですか」と尋ねた。私の問いかけに対し、“ブル”将軍は、“モンテル”大佐が、ソ連戦車が間違いなくベルツォヴィズナに入ったと伝えたのだと答えた。“ブル”は、「どうか神よ、ソ連軍が入る前に我々のワルシャワの掌握が間に合いますように」とも言った。

“ブル”将軍の下した決定に対し、私には言うべきことは何もなかった。参謀部の将校は総司令官が決定を下す前ならば自分の意見を述べ議論することもできるが、決定が下された後では、たとえその決定の妥当性に同意できなくても、忠実に誠意をもって、その実現に努めなければならない。

私はただ、8月1日の午前の会合は欠席させてほしいと申し出た。緊急に処理すべきことが山ほどあったのだ。退席する時、部屋の入口の階段のところで、第II部長の“ヘレル”大佐に会った。私は彼に小声で決定について教えた。階下では“クチャバ”大佐にも会った。同じように、決定について教えた。

私はトファルダ通り27番地にある自分のアジトに戻ると、第III部の将校たち——ズィグムント・ドブロヴォルスキ少尉（“ズィンドラム”）、フェリクス・マヨルキューヴィチ少尉（“イロン”）および女子伝令の“モDESTA”、“ヴァツカ”、“ヨアンナ”——が私を待っていた。私は指令を出し、マズルキューヴィチ中佐（“ラドスワフ”）と“ベルク”に決定を知らせた。

個人的には、戦闘開始の「時」は尚早であると思った。ベルッヴィズナに戦車が現れたといっても、即座にワルシャワ攻略に出ることを意味するものではなかったからである。

* * * * *

アントニ・フルシチェル 「戦闘開始前」

1940年以降ワルシャワ地区の任務は状況に応じて変わってきた。ポーランド全域での蜂起は、好機に実施する計画が立てられていた。好機とは、占領者がほうほうの体で逃げ、その軍がポーランドから遠く離れた位置にあるか少なくとも我々の東方国境にいて、行政部に混乱が起き、被占領地で地下軍が立ち上がる態勢にある時のことである。しかも、連合軍が第三帝国中枢に向かって勝利の行進を続け、少なくとも西側でドイツ軍崩壊に向けた効果的な作戦が展開されていることが条件だった。

1944年2月、ワルシャワ地区の任務は、強制移住があった場合の市民の擁護に限定された。強制移住は、東部戦線が移り、武装化の整った軍の一部（総勢およそ4千人）がスキェルニェヴィツェ地区の指揮官の傘下に入った時に起こりうることであった。

1944年7月25日、私は、「ロンドン」〔訳注—ポーランド亡命政府陣営を指す〕がワルシャワ地区で蜂起を計画していることを知った。決行の時は国内軍総司令官が決めることになった。どの地区も「嵐」作戦を実施していたが、ひとりワルシャワ地区は最大の努力、すなわち総決起の戦闘を実施する地区であった。武器不足は大量の空輸でまかなわれるはずであった。「街とオケンチェ・ビェラヌイ両飛行場、ラシン無線局の掌握。鉄道の結節点としてのワルシャワを守ること」——これが任務であった。

この任務を遂行すべく、ワルシャワ地区は1941年から準備に入っていた。しかし、1944年7月下旬の状況は、全国で、また首都で蜂起を実行できるような状況にはなかった。敵はこれまでになく強力で、軍にも行政部にも解体の兆しはなかった。一方、ロシア軍の強固な前線が近づきつつあり、その第一波はワルシャワ地区の南東部、すなわちオトフォックとミウォスナを、南からはヴァルカを襲っていた。

わが軍の作戦は、すべての攻撃対象を急襲するというものだった。ワルシャワの中央部では、ヴィスワ川に架かるすべての橋梁、プラガ中央部では東駅・ヴィレンスキ駅・プラスキ駅が主な攻撃目標であった。中央で温存されている予備軍は、状況の進展に応じて利用されることになっていた。ヴィスワ以西のワルシャワ郡では強力なパルティザン部隊が活動し、ヴィスワ以東ではドイツ軍の後衛を攻撃することになっていた。

個々の対象物への攻撃は、あらゆる場合を想定して数え切れないほどの訓練をしてきた。どの階層の指揮官も重要な人材だった（占領期が彼らに高度の社会性を培うことになった）。

ワルシャワのドイツ軍（SS、SA、憲兵、ウクライナ・トルコ兵を含めて3万8千人）は7月最終週に3個師団（2つは装甲師団）増強された。ひとつはプラガ郊外に現れたヘルマン・ゲーリング装甲師団である。もうひとつはヴィーキング（ヴァイキング）装甲師団で、戦車350輛と大砲を持ち、ワルシャワの諸所の地区に配置された。

これに対して投入予定のポーランド兵は4万人であった。彼らは、われらが祖国で5年の長きにわたって恐ろしい占領政策（とりわけ酷かったのがワルシャワである）を実施してきた獣のごとき敵兵に報復せんと望んでいた。士気が上がる4万人は何としてでも自由の光を見いださんと願っていた。

首都のポーランド人は撤退をつづけるドイツ兵を見ており、近郊で砲撃を耳にしていた。ヴァヴェルやアニンの火災の様子が見えた。敵は1943年10月以降ひっきりなしにワルシャワの通りで残虐行為を働いてきたが、それに対して罰を受けることもなく撤収してしまうのではないかと、人々は気を揉んでいた。

モスクワ放送は1週間前から決起を促していたが、それだけの根拠があった。優柔不断な指揮に対してますます非難の声がかけていた。我々の小隊の若い指揮官たちが、どこの者とも知れない他者の指令に従ってしまう恐れが十分にあった。市民は誰もふつうではない事態を予感していた。一触即発の状態であり、状況を抑えておくことは難しかった。軍事的に責任を負う人々の正常な知性は、高揚する精神を抑えておくことが難しいと判断するのであった。各家庭の聖壇のもとでは、夕方に神に捧げる歌「イエスよ、この孤独な時を変え給え……」が時間を超えて響いた。ワルシャワは軍事力を駆り出そうとする方向に向かっていった。

このような状況のもとで、また新たな要因が生まれた。ドイツ軍の地区司令官が、7月28日に要塞を築くために10万人の市民に出頭するようにと求めたのである。ポーランドの若い兵士たちはこの指令に驚き、部隊は散り散りになってしまう恐れがあった。若者たちが捕られてしまったら、地区の最も容易な任務である、撤収をつづけるドイツ一味から市民を護るという任務さえも果たせなくなってしまうだろう。

このため私は1944年7月28日、部隊に対し警戒態勢に入ると命じたのであった。この命令で、部隊はアジトに待機することとなった。精神の高揚を抑え、時期尚早の蜂起の勃発を引き起こしかねない勝手な攻撃を抑えることが狙いだった。ドイツの行政部が、出頭命令に応じなかったことに対し報復を行わないことが明らかになると、私は警戒態勢を24時間後に解いた。

7月29日、ロシアの装甲偵察隊がプラガ（タルグヴェク）に現れ、楽々とドイツ軍の中に割って入っていった。ドイツ軍はこの地に1940-41年に防衛網を築き、抵抗拠点を掘り、ゼグジェからヴルカ・ラズイミンスカ、ジェロンカ、オクニェフ、ミウォスナ、ザレシエ、ヴォンゾヴナを経てオトフォツクに至る守りを固めていたわけであるが、そこにラズイミンからやって来たロシア軍が侵入したのである。ドイツ軍のワルシャワ橋頭堡は弱体化していた。ヴィスワ川沿いでは防備が皆無であった。

数十人のスパイ将校が毎日敵軍内で活動して、最も新しい情報をもたらしていた。ヴィスワ川西岸では、赤軍の装甲師団がグルイエツに達しようとしているという情報が入った。ドイツ軍は大急ぎでホイノフフスキェ森林（コンスタンチンとイエジョルナの南方）の守りを固めた。また、一部の師団は南から安全を確保するため、ヴァルカ方面に回った。

参謀部での情勢分析は冷静に行われていた。連合軍と赤軍は協力する取り決めがあった。このことは、これまで破竹の快進撃をつづけてきた赤軍が行動を控え、国内軍による作戦を傍観するということがあったとしても（実際、ルヴフで5日間、ヴィルノで3日間そうだった）、連合軍が戦闘に入る必然性があることを示していた。赤軍がワルシャワと近郊の都市を苦もなく制圧するはずであると、我々は考えた。事実、ワルシャワにはベルリンク軍が入った。同軍がワルシャワに入ることは、ラジオや広報誌を通じて十数日前から伝えられていた。

国内軍総司令官ブル将軍は7月31日、翌8月1日の17時に作戦を開始する決定を下した。この判断の基になったのが、私が行ったワルシャワの戦況報告であった。7月の最後の5日間、ブル将軍と政府代表（副首相）は多忙を極めていた。会議は一日に2回、9時と18時に開かれた。

7月下旬、私の参謀部はフィルトロヴァ通り68番の46、47、48号で執務をとっていた。向かいでは、ドイツ警察1200人が駐留しており、「きっちり」と武装化を進め、ナルトヴィチ広場の学生寮を占拠していた。ここはワルシャワのドイツ側が守りの要のひとつとしていたところであり、1・2階の壁穴からは射撃兵が構え、また塹壕が掘りめぐらされ、終日出入り口は監視されていた。ドイツ軍が占拠する建物はどれもこのような状態だった。もしなんらかの理由で私と部下がいなくなることがあったならば、作戦を開始し指揮することができなくなったことであろう。ブル将軍は私の部下や部隊とは直接的なつながりがなかったからである。

蜂起の開始時刻が17時になったのはどういうわけか。夕方の5時に決めることで、ドイツ軍を急襲することが可能だったからだ。国内軍総司令部が1942-43年に出していた指令では、作戦はいかなる場合でも夜間（0時前後）に開始すると厳格に規定されており、日中の開始は想定外であった。残るは、部隊の召集と攻撃対象への移動の問題であった。このことは主にワルシャワ地区に関することであり、訓練は例外なく深夜の作戦開始を前提としていた。ドイツ側に漏れた指令は多数あったが、総司令部は作戦開始時刻の変更を伝える指令を出していなかった。

国内軍が蜂起の準備を進めていることは隠しようがなく、ドイツ軍が絶えず非常事態に備えていたことから（夜間開始で急襲するなど、論外であった）、ブル将軍は、日中の作戦開始という私の提案に同意した。都市で交通量が最大となる時間ならば、ドイツ軍を襲うことが比較的容易であると私は敷衍した。この時間に公務員や工場労働

者が帰宅し、通りは急いでいる市民でいっぱいになる。路面電車は文字どおり立錐の余地もないほどだ。通りを巡回している者にも取締りが効かない。17時頃に交通量がふえることに歩哨も慣れてしまっており、通りを行く人並みは彼らの関心を引くことがなく、まったく自然なこととなっていた。この混雑にまぎれて、兵士たちはグループをつくり歩哨に攻撃をかけ、建物の入口の掩蔽壕を押さえるなど、成功が望める。また、小隊を移動させ召集しても、この時間ならば、ゲシュタポや警察機構の関心を惹起しないで済む。

私がこの時間を示したのは7月25日（ラシンスカ通り52-54番）であった。この会合には、4年間で初めて、私の直属の部下が一堂に会した。シルドミエシチェ・ジョリボシュ・ヴォラ・オホタ・モコトッフ・プラガ・オケンチェの各地区およびワルシャワ郡の司令官が出席した。参謀部からは地区参謀長〔訳注—スタニスワフ・ヴェベル（“ヒルルク”）中佐〕が、市民行政部と連絡主任および連絡将校〔訳注—カジミエシュ・ラルイス（“アドヴォカト”）大尉〕がその場にいた。

この4年間、安全を重視して、4人以上が同時に一箇所に集まることはなかった。会合の日が決まったのは数日前のことだった。召集をかけられた者は、市民（とりわけ守衛）に気づかれることもなく、集まることができた。命令書は簡潔にまとめられていた。蜂起の10日前に、こうしたお決まりの会合のあり方を変える必要が生じた。会場に大勢の人間を集め、少人数の武装化した兵士を護衛においた。しかるべく配置された兵士たちは、会議のメンバーに逮捕の危険がないようにする必要があった。

日々の軍事作業をして4年が経った。我々は日曜も祭日もなく、日に10時間から12時間も働いた。休日の日には小隊その他の監察が行われた。平日以外の自由日にだけ、監察のための召集をかけることができたからだ。軍務教練には平均して週に4時間をかけた。700を超える小隊に対して4年間ですべての区域（200弱）で監察を行うことができた。もっぱら、休日を利用した。こうした監察を通じて、作業が順調であることを私は確信したのである。

「8月1日17時」とある、作戦開始命令は暗号で配布された。7月31日20時頃に配布された。命令はワルシャワの女子伝令たちによって下部地域に送られ、さらに小隊指揮官へと送られた。その後さらに下部組織、実戦部隊、各兵士へと送られた。一部の下級指揮官は8月1日の8時から10時の間に指令を受け取った。

8月1日9時、フウォドナ通り4番12号で、私はブル将軍に戦況と指令発令について伝えた。ブル将軍は政府代表と参謀総長、第Ⅲ部長、第Ⅵ部長、H. K.〔訳注—ヤニナ・カラシュヴナ少佐〕と一緒にいた。ぐずついた8月の朝だった。部屋を辞する時挨拶をしたが、次にその機会が来るのが25日先になろうとは思わなかった*。

8月1日15時、私はヤスナ通り20番地のアジトに行き、17時から、地区の蜂起の間の司令部に予定されていた「ヴィクトリア」ホテルにいた。

11時、ドイツ軍の占拠する建物から対空警報を伝えるサイレンが鳴った。しかし、飛行機の音は聞こえなかった。ワルシャワの全ドイツ人に伝える警報だったのだ。

この日、市民生活に異常は見られなかった。交通はふだんどおりで、神経の高ぶりなどまったく見られなかった。兵士たちは肉親にさえ悟られずに、午後の戦闘に備えた。戦闘は予想に反して63日間の長きにわたって続くことになるのである。

原注

*私は次の通りを通過して行った。ジェラズナ通り、スタルインキエヴィチ広場、コシコヴァ通り、ラシンスカ通り。途中2度ドイツの警備隊に会った。通りの両側に20人ほどが立っていた。偵察と護衛とから成っていた。警備隊を見て、不安な様子を示したり、急に行き先を変える者がいたら、どんな者でも取り押さえることが彼らの任務だった。この場合、私は逮捕されずに済んだ。私は、「暴露につながるような」書類を所持していなかった。ワルシャワ郡長の経営する作業場の従業員ということになっている身分証明書は偽物でも、自分に自信と、警備隊の者を直視できる余裕を与えてくれた。「ケンカルテ」と呼ばれたこの証明書と雇用証明（アンジェイ・スマラフスキという名で、ヴォンゾヴナ、スタラ・ミウォスナ、オクニェフで家畜の監視補助をしていることになっていた）を1946年10月15日にニュルンベルクの捕虜収容所で示したところ、それを見た防諜将校は、本人と確認した後で、鼻息も荒く息を吸い込んだ。一方、国防軍の将校は彼と皮肉っぽい目つきを交わしたが、これはゲシュタポの無能さを示すものであった。これらの証明書は、私がグロフフに住んでいた時に、通りで提示できるようにと準備したものであり、役に立った。1944年8月1日前の最後の数週間、私はワルシャワの地区の官吏ということにして、グジボフスカ通りに住んでいた。

地下生活に触れたついでに書き添えたいことは、証明書は十数週間ごと（時には数日ごと）に取り替える必要があったということだ。この任務を負っていた部局は最も重要な部であった。身分証明書を持つ者は、証明書に記されている職業にある特徴を醸し出さなければならなかった。容貌を変え、住居や環境なども替える必要があった。

